

2-02 児童発達支援・保育所等訪問支援による 作業療法士の取り組みの実際について

○吉井 雄志(OT)

医療法人社団 野間医院 こども発達支援センター ポレポレの木

Key word：自閉スペクトラム症 / 障害, 他職種連携, (保育所等訪問支援事業)

【はじめに】発達障害児が集団生活に適応するためには、周囲の関わる者たちが児童の特性や具体的な介入方法について共通の理解を深めることが重要である。今回、自閉スペクトラム症の幼稚園児に個別作業療法や訪問支援を行い、本児童の発達に良好な変化が認められたので報告する。なお、本研究発表を行うにあたり、開示すべきCOIはなく、家族からの同意も得ている。

【症例紹介】自閉スペクトラム症・軽度知的障害と診断された4歳男児。幼稚園では保育プログラムには参加できず、独りで遊ぶことが多く、教室から飛び出すこともしばしば認めた。また、好きな遊びを終了できないなど、行動の切り替えの困難さや他児童の作品を壊して楽しむなど、他者の気持ちへの理解にも課題を認めた。周囲からの情報が多いと整理できず状況の理解が難しくなるが、短い端的な声かけや視覚的指示は伝わりやすく、活動への参加や行動の切り替えがしやすくなる発達特性が認められた。

【方法】2019年4月より個別作業療法(児童発達支援事業)を毎週1回(45分)、2019年6月より幼稚園への訪問支援(保育所等訪問支援事業)を毎月2回、実施した。個別作業療法では本児童への直接的な支援だけでなく、保護者と育児相談の時間を設け、保護者へ作業療法での変化や支援のポイントを伝達した。訪問支援は園生活の様子を評価し、その後に担任と意見交換を1時間程度行った。初回の意見交換の時に個別作業療法の様子を基にした本児童の特性を伝えた。担任と話し合い、支援方針を「登園時の荷物の片付けを自分で行う」「教室内で楽しみを見つけ、他児童と過ごすことができる」とした。支援内容は登園時の荷物の片付けのために写真カードを用いた手順表の作成の提案や教室内で楽しみを見つけるために本児童の特性に応じた保育の提案、他児童と遊びを楽しめる保育プログラムへの参加方法の提案などを先生に行い、本

児童を間接的に支援した。「登園時の荷物の片付けを自分で行う」ことはCOPMを用いて担任に聴取し、遂行度3・満足度3であった。

【結果】訪問支援開始時、作業療法士と担任では本児童の特性の捉え方に相違があった。作業療法士は日常的に行っている作業は工程を順に分かりやすく提示することで自立できると評価した。担任は注意が散漫しやすく複数の作業工程を自立して行うことは困難と感じていた。そのため意見交換の時間を十分に確保し、保育プログラムの様子も評価し、伝達した。その後の園では作業療法士が伝達した支援内容を積極的に取り入れ、担任自身も本児童の特性に応じた内容を立案し、実践した。2019年9月頃には教室からの飛び出しも減り、参加できる保育プログラムも増えた。他児童と一緒にブロックを組み立てて遊ぶなど、場や玩具を共有して遊ぶ様子も見られるようになった。また、登園時の荷物の片付けも手順表を見て一人でできる頻度が増えた。COPMも遂行度9・満足度8となった。保護者からも声のかけ方を工夫することで行動の切り替えが行いやすくなったという感想が聞かれた。

【考察】今回、自閉スペクトラム症の幼稚園児に対して個別作業療法や訪問支援を実施した。訪問支援開始時には園の担任と見立ての相違があったが、本児童の行動評価と対応方法を具体的に伝達することで、担任や家族からの理解を得られたと考える。作業療法士が、発達に特性を認める児へ直接支援のできる時間は限られているので、児がほとんどの時間を過ごす園や家庭と共通の認識を持ちながら他職種とも連携して発達を支援することは非常に重要である。